

地域がつくる暮らしやすさ

Part 2

臨海丘の手

港と湾を囲む横浜で最初の山の手エリア

松ヶ丘・白幡・西寺尾地区（神奈川区）

幕末に横浜が開港され、多くの外国人が住むようになった。当初、彼らは関内地区の外国人居留地に住んでいたが、次第に埋め立て地よりも景観がよく、土地が乾燥している山手の丘陵地に住宅地を求めるようになった。山手居留地の誕生である。そして、根岸に乗馬遊歩道路や競馬場を設け、富岡を海水浴場とするなど、かつてペリー艦隊が“マンダリンブラフ”として絶賛した根岸湾の崖線に沿って居留地文化が展開された。こうした港を望む崖線上で展開された西洋人の居住様式やライフスタイルは、明治・大正期の政治家や豪商、

文人たちに「根岸湾別荘文化」として受け継がれ、昭和に入ると、日本人による「一間洋館」に象徴される中流以上のホワイトカラー層の居住スタイルへと発展していった。

ここでは、横浜で最初の「山の手エリア」であり、横浜港と根岸湾を望み、磯子、金沢から鶴見・神奈川まで南北に屏風のように広がる丘陵地——下末吉台地から一部三浦丘陵に連なる住宅地の過去・現在・未来を見てみたい。



●松ヶ丘



●白幡



●西寺尾